言語センター広報 *Language Studies* 第25号(2017.1)小樽商科大学言語センター

ジャーナリズムと創作の間
― マリアンネ・エールマンの雑誌掲載小説についての一考察 ―

北　原　寛　子

1．18世紀における小説の状況

18世紀は小説Romanが急速に発展した時期である。小説はそれまで騎士道物語Rittergeschichteや民衆本Volksbücherと呼ばれていたさまざまな文芸作品が、散文を中心にした文体で記述された物語であるという形式的な共通点によって同一視され、集約されて成立したジャンルである。小説という名称で呼ばれることになった個々の作品は、恋愛や冒険などその内容に応じて由来するジャンルの特徴を受け継いでいた。小説は、各ジャンルの典型的な展開を継承すると同時に、それらのジャンルへの批判と非難も継承することになった。筋の展開が不合理であるとか、恋愛がふしだらで道徳に反し、良識ある子女が読むべきではないとかなどの意見があり、現代のように文学の精髄と認められるどころか、低俗な娯楽と貶されているような状況であった。内容を問う以前に、娯楽のための読書自体が、日常の仕事に充てるべき時間や集中力を奪う怠惰な行為であるという批判もあった。このような批判にもかかわらず小説の流通が拡大していく一方、小説の質を上げて1つの文学分野になることで批判を克服しようとする動きもあった。例えば、ブランケンブルクは『小説試論』Versuch über den Roman（1774）において、理論面から小説の質を向上させようと試みた。[i] またJ. K. ヴェーツェルは『ヘルマンとウルリーケ』Herrmann und Urlike（1780）において、実際の作品を通して小説というジャンルの向上に努めようとしたと、前書きで表明している。[ii]

18世紀ドイツでは、道徳的な批判に耐え、なおかつオリジナリティーがあり、叙事文学として一定のレベルに達している理想の小説を探求するべきだという意見が非常に強くあった。こうした傾向は19世紀全般を通じて継承され、20世紀にいたるまで小説を評価する場合の基準となっている。文学史の記述にはこの理想の基準で小説の歴史を整理し、記録しようとする傾向が見られる。そのため18世紀には『ドン・キホーテ』や『ロビンソン・クルーソー』など、非ドイツ語圏の作品の影響を受けて成立した作品群があるが、これらはオリジナリティーに欠けた模造品であり、文学ではなく娯楽、せいぜいよくとも通俗小説Trivialromanにすぎないとして、文学の歴史から排除される傾向がある。しかし、こうした多数の作品が散文による文学の創作と受容双方の裾野を広げ、全体のレベルアップに貢献したと考えるならば、これらも小説発展史の一段階とみなすべきであろう。[iii]

本論で考察の対象とするマリアンネ・エールマンが自らの雑誌に掲載した作品は、文学か通俗小説かのどちらに含まれるのかといえば、通俗小説に分類するのが適当と思われる。駄作をあえて研究の対象とする理由は、小説という形式が18世紀においては芸術か通俗かの二者択一ではなく、それ以外の役割を担っていたのではないかと考えられ、この仮説について検討するためで

ある。作者が執筆の目的としたことと、それらを受容する読者が作品に期待したことに乖離があると思われる。この小説の流通の現場での二重の基準が、当時の社会的文化的状況に基づいて発生したという仮説をたて、この点について考察してみたい。

2．マリアンネ・エールマンと雑誌『アマーリエの休息時間』について

マリアンネ・エールマン（旧姓ブレンターノ）Marianne Ehrmann geb. Brentanoは1755年にスイス・チューリヒ湖の北岸にある町ラッパースヴィルRapperswilに生まれ、1795年にシュトゥットガルトで没した作家・雑誌編集者である。彼女はカルヴァン派の商人の家に生まれた実直な市民層の出身だが、両親・兄弟らと20歳ごろまでに死別し、不幸な結婚を経て、20代半ばで演劇の世界に飛び込んだ。その傍らで発表した『ある女性の余暇』Müßige Stunden eines Frauenzimmersと『女の哲学』Philosophie eines Weibsが好評を博した。1785年にはシュトラースブルクで劇団から離れて滞在し、作家活動に専念し始める。その地でテオフィル・フリードリヒ・エールマンと出会って2度目の結婚をし、夫婦で執筆活動に取り組んだ。1788年になると2人はシュトゥットガルトに移り住み、著書の出版や雑誌記事の提供を精力的に行っていた。[iv]『アマーリエの休息時間　ドイツの娘たちに捧ぐ』Amaliens Erholungsstunden. Teuschland Töchtern geweihnt[v]は、彼らがさらなる経済的な成功を目指して1790年に発刊した月刊誌である。この雑誌は人気を博し、1000部ほどがドイツ語圏で流通したという。[vi]

この雑誌は1号およそ6ボーゲン（全紙6枚＝96ページ）で構成され、3号をまとめて製本すると1巻の書籍になるようにページがつけられている。その内容は本研究で取り上げる20－30ページの物語のほかに世界の文化の紹介や社会情勢、詩などで、巻末に楽譜が付録に付くことがあり、娯楽的な性格を備えていることがわかる。女性の教育や人間観察についての厳しい指摘を含む論文が掲載されており、道徳週刊誌の流れをくんでいることもわかる。エールマンはこの雑誌を発行した目的について、他誌に掲載した広告文に次のように記している。

> しかしどうして、私たちの理性に早いうちからしかるべき方向性を与えないのでしょうか。―どうして私たちからできるだけ多くの無気力を遠ざけないのでしょうか。―どうして私たちに、ふさわしい時に情熱と原則でもって戦うことを、自分でじっくり考えることで私たちの義務を知ることを教えないのでしょうか。つまり、どうして私たちは最初に若いうちから人間に育てられないのでしょうか。―あらゆる女性の義務は、奴隷的な抑圧のもとでただ機械的にするよりも確信をもって追求するとするなら、より歓迎すべきものになるでしょうに―。
>
> 私がこの雑誌で、私たちの女性の友人たちの精神と理性、心と知識欲に私の力の及ぶ限り滋養を与え、啓蒙し、高貴にするように努力しようとすることは、私が先ほどから私たち女性の哀れさに必死で対抗しようとするために用いている激しさから推し量ることができるでしょう。[vii]

最後の文で「激しさ」と訳した語は、直訳すると「炎」Feuerである。たしかにエールマンの燃えるような激しさは、「なぜ」「なぜ」と問いを畳みかける文体によって効果的に表現されてい

る。彼女は、当時の女性の置かれた状況は哀れで、それはきちんと教育を受けてこなかったことに起因するのだと社会に告発している。「情熱」に身を任せて道を外れないように、生活や人生の「原則」を銘記できるようにきちんと教えておくべきであり、必然性を自分で考えて納得することができるならば、家庭の義務に喜んで従事できるはずであるという信念が読み取れる。家事活動は現代では女性にのみ義務が負わせられるべきでないと考えられるようになったが、女性が担当するのが当たり前であると考えられていた18世紀末にあっても、誰もが積極的に処理するというわけではなかったことがエールマンの記述から読み取れる。女性はなぜ家事ができないのか、という疑問に対して、現代では女性のみに抑圧的に負わせるべきではないからという答えが期待されるが、エールマンは女性に適切な教育が欠けているためにこれに積極的に従事できないのだという答えを出している。2つの答えは正反対だが、女性の置かれた状況をより良くしようとする理念においては共通していると言えるだろう。エールマンの考え方には時代の社会状況や文化レベルなどの限界があるのは確かだが、女性の地位や品位を向上させるために真剣に取り組んでいる姿勢は評価に値する。そうして、「ここで私がお知らせする雑誌には、二重の題材があります。1つは教育と教示、2つ目は娯楽と女性の知識の拡大です」[viii]、と18世紀の偉大な著述家ゴットシェートもホラティウスを継承して唱え、現代にいたるまでドイツで娯楽を正当化するために冠せられる「楽しませつつ教える」の精神が主張されている。このような雑誌の理念から考えると彼女の散文による物語は、娯楽的にして教育的な目的のために執筆されたといえる。

上述したように、18世紀において小説は反道徳的、非理性的という内容面への、そして読書行為そのものが他の活動の妨げであるという外的な側面から批判されていた。教育のためという信念を抱いていたとしても、小説に従事することはあまり誉められたものではなかったと推測できる記述が残されている。これはエールマンの夫テオフィルが、彼女の死後間もなく発表した追悼を込めた伝記の中の一節である。

> 彼女は学者になろうとは少しも思っていませんでした。というのも、彼女はこれが女性の使命ではないときっぱり確信してしたからです。だから彼女は全人生を通じて学術的な書籍を一冊も読んだことがありませんでした。彼女は若い時に私たちの古典的な散文作品を演劇や小説を含めて読んでいました。読書は当時、彼女の余暇のお気に入りの過ごし方でした。大人になってから彼女はたいてい道徳的な書籍だけを読んでいました。時折は旅行記を若干と分かりやすく書かれた歴史の作品を読んでいました。小説を彼女はもう好んでいませんでした。[ix]

エールマンは小説を執筆していたが、読むほうは好きではなかったというのである。かつて好んで読んでいたことは容認されているが、それはあくまで若い頃の好みという断りが加えられている。さすがに作家の読書生活が聖書のみというわけにはいかず他の種類の書籍も挙げられているが、それでも旅行記と歴史、道徳的な内容のものだけに限定されている。この読書傾向は、『ミュトスコピア・ロマンティカ』と題された1698年に発表されたカルヴァン派の聖職者ゴットハルト・ハイデッガーによる小説批判論で小説の代わりに推奨されていた歴史をよむべきだという主張と一致している。[x]テオフィルはエールマンを追悼するこの書籍で、何度も彼女が家事に長け、養子も愛情をもって教育していたことを繰り返しており、執筆という仕事をしていたにもかかわらず、家庭的な女性の美徳を備えた道徳的に非の打ちどころがない人物として提示している。

それだけ一層小説を読むことが恥ずかしい行為であるかのように、彼女の読書生活から排除されているのである。自分では読む気のないジャンルである作品を執筆したのは矛盾した行為のように思え、あるいは読者を見下していると解釈できる。なぜエールマンは面白いと感じていなかったジャンルを用いたのだろうか。この点についても作品を分析することで明らかにしていきたい。

3.「楽しませつつ教える」作品

エールマンはみずから小説を読まなかったにもかかわらず、読者にはどのような小説を読ませようとしていたのだろうか。4つの特徴的な作品を取り上げて分析することにしたい。

1）可哀そうなハンナ（まったく本当のお話）

Die unglückliche Hanna. (Eine völlig wahre Geschichte.)

最初に取り上げるのは、雑誌の初期に掲載されエールマンの作品のなかでも比較的有名な物語で、誘惑されて捨てられる女中ハンナが主人公である。「人々が彼女を咎めることができるとすれば、ほかの多くの教育を受けていない人たちと同じように、自分をかわいい女の子だと思っており、かわいいお顔に入れ込んでいたということだけです」（1790, H. 2, S. 97）とうぬぼれが少々強いが気立ての良い少女として造形されている。ハンナが暮らす町には大学があり、多くの大学生の青年が彼女に言い寄っていたが、彼女は冷たくあしらっていた。しかしその中の1人カール・シュヴァマーは、彼女が彼に示した好感を見逃さずに近寄り、結婚の約束をして恋仲になった。ところが心変わりをしたので別れたいという手紙を故郷の町から送りつけてきた。その頃にはハンナはすでに妊娠しており、追い詰められた彼女はその町に向けて徒歩で肉体的にも精神的にも苦しい旅を決行した。無事に到着しカールと連絡が取れたものの、彼は手紙の返事に手切れ金を同封していた。「つまり私はあなたに名誉や健康、良い名前や静かな暮らし、幸せを売ったということかしら」（1790, H.3, S. 203）と逆に自尊心を傷つけられてしまう。その町では身ごもった未婚の女性は出産するまで牢獄にとらえられるという法律があったが、カールのお金はその罪を罰金によって逃れられるだけの額があった。それにもかかわらず、ハンナは怒りのために牢獄にとらえられる道を選び、そこでロッテと名付けられた娘を産んだ。出所後ハンナは娘のおむつの工面ができず、おもわず亜麻布を盗んでしまう。次に彼女は盗みの罪で捕まってしまう。裁判で責められても決して父親の名を明かさず投獄される。そこで絶望のあまり娘を殺してしまい、結局死刑になってしまう。

これはグレートヒェン悲劇として有名なゲーテの『ファウスト』第一部と類似した未婚の母の子殺し事件のパターンである。教育を受けていないとはいえ、良心に従って健気に生きてきた少女が、その若く生き生きとした外見に魅了された青年と愛し合ったばかりに、そこからどんどん不幸になり続ける話である。婚前交渉で社会の規範から少しばかり逸脱し始めると、妊娠や未婚の出産、貧困が原因の窃盗、殺人と取り返しのつかないところまで罪を重ね続けることになるという恐ろしい因果が描かれている。これは少女たちに、このような結果を招かないために、恋愛にうつつを抜かすべきではないという警告をするために創作されたと考えられる。

2）ビアンカ・デ・ラ・ポルタ　イタリアの歴史からの本当の逸話

Bianka de la Porta. Eine wahre Anekdote aus der italienischen Geschichte.

この物語にまつわる銅版画が掲載号の巻頭に掲載されている。ぴかぴかと光る金属の鎧や重厚な城壁から、中世を舞台にしていることがわかる。ヒロインのビアンカはパドゥアの市民ということになっており、中世のイタリアを舞台にした架空の物語となっている。ビアンカの夫が出征することになり、彼のそばを離れたくないビアンカは、男性と同じように鎧を身につけ、夫とともに戦場に赴く。しかし夫は名誉の戦死を遂げてしまう。そこで美しいビアンカに懸想していた貴族が、すぐに彼女に言い寄り始める。しかしビアンカは決して夫への愛を捨てることがない。ついに夫の遺体を墓に収める日が来たが、ビアンカは自ら閉じ行く墓穴に飛び込み、不埒な誘惑者を見事に追い払い、貞節を守り通したという話である。ドラマティックであるとともに、ビアンカの貞節を表現するエピソードがあまりにも誇張されていて、滑稽に見えるほどである。たとえば誘惑者によって塔に追い詰められたビアンカは窓から飛び降りて逃げ出すが、窓に下にたまたまベッドがあり、彼女は高いところから飛び降りたにもかかわらず、そのままぴょんぴょんと走って逃げてしまう。（1790, H. 6, S. 38）エールマンはこの物語を通じて、あるいはうまく通じて表現できていないとしても、テクストの中に混ぜて訴えたかったことは、女性がいついかなる状況にあっても困難に打ち勝たなくてはならないということである。それは物語の冒頭に、「外国のごみ、あるいはドイツ語でいえばフランス的コケットは彼女たちの胸を毒し、その独自性を弱らせてしまいます。お愛想と軟弱さは彼女たちから気力を奪い、その勢いを阻害し、精神を弱らせるのです」（1790, H. 6, S. 2）、と記していることからも読み取ることができる。

3）ロザーリエ　あるいは誰が誘惑の策略から純潔を守れるか　本当の物語

Rosalie, oder wer sichert Unschuld vor Verführerslist? Eine wahre Geschichte.

この物語は波乱万丈である。ロザーリエは5歳の時に母にベルリンに連れてこられた。母が夫以外の男性と出かけて遊んでいる間に、幼い彼女は寂しさのあまり宿屋で泣きわめいていたが、そこにポンメルンからフェルネク伯爵夫人が到着した。彼女の夫は遊び人で、その上彼女を信頼しておらず、大事な息子の養育を任せられないとして、どこかに連れ去ってしまっていた。泣いているロザーリエが気に入り、フェルネク夫人は息子の代わりに彼女を育てようと領地に連れ帰ってしまう。フェルネク伯爵はロザーリエが気に入らないながらも家にいることは認めていた。それから12年が過ぎ、ロザーリエは美しく成長したが、ある日伯爵夫人が亡くなってしまう。伯爵はロザーリエに欲情を抱くが、ロザーリエは拒絶し、本当の身内を探したいという。そこで2人はベルリンで12年前の宿屋に赴いた。滞在4日目にロザーリエの父の姉妹を名乗る人物が現れ、「おば」に引き取られる。「おば」はロザーリエにベルリンで裕福な暮らしをさせ、劇場通いなどの娯楽にも積極的だった。若いヴォーラー伯爵が社交の場でロザーリエの美しさに目をとめ、2人は惹かれあう。ある日「おば」の知人たちと夜通しの食事会が開催され、途中で眠り込んだロザーリエはいつの間にかいつものベッドに戻っていた。横で激しい後悔にさいなまれる恋人の姿を見て、一線を越えてしまったことに気が付いた。ヴォーラーはロザーリエとの結婚を決意し、「おば」のところに赴いた。ところがそこでヴォーラーはフェルネク伯爵に出会う。ヴォーラーはフェルネク氏が昔母親から遠ざけた息子であった。父は息子が娼館にいることを咎め、ロザーリエと言葉を交わす間もなくそのまま引き離してしまった。実は「おば」はフェルネク氏と共謀

してロザーリエを堕落させようとする娼婦だったのだ。ヴォーラーが突然姿を消したことで捨てられたと勘違いしたロザーリエは、悲しみのあまり気晴らしに興じ、ついには男性たちとも淫らな関係を結ぶようになり、フェルネク氏とも肉体関係になったことが示唆される。つまり、ロザーリエはベルリンで立派な娼婦に仕立て上げられてしまったのだ。そこに父の監視を抜け出してヴォーラーがロザーリエと連絡を取ることに成功し、2人は逃げようとするが、また父が立ちはだかりロザーリエが捕まってしまう。結局彼女は服毒して自殺する。その数か月後に本当の母親がフェルネク氏の元に現れ、ロザーリエはヴェルナック伯爵令嬢だったことが判明するが、「でもそれが何の役に立つのですか。不幸な女性の人生を楽しくすることのできる喜びは、手遅れになってから来るのです。でもいつか最後の審判の時に、永遠の呪いも誘惑者や殺人者に手遅れになってから来ることは決してありませんがね」（1790, H. 9, S. 34）という言葉でもって物語が締めくくられている。全体を通してみると、実母の育児放棄や婚外恋愛といった不道徳行為がロザーリエの不幸の根本にあるが、母に罪があるようなコメントはなされていない。反対に、人々の悪意に出くわして道徳的に退廃していくロザーリエ自身が、不幸に耐える力がなく恐ろしい結末を招き寄せたかのように扱われている。純潔なヒロインが大都会ベルリンで楽しく過ごして相思相愛の相手と運命の出会いをしたことがきっかけで娼婦の仲間入りをするなどの不幸に巻き込まれるエピソードは、先に挙げた『ヘルマンとウルリーケ』にもみられる筋の展開である。その作品とエールマンの違いはヒロインの過ちへの寛容度にあると思われる。ヴェーツェルの作品でヒロイン・ウルリーケは妊娠し、誘惑の町ベルリンから身重の体であてもなく恋人の姿を追い求めて旅立つ。しかし心優しい牧師に保護されてそれ以上の不幸に追い詰められることがない。しかしエールマンの短いながらも凝縮した物語においては、ヒロインが絶望して自ら死を選ぶまで追い詰められてしまう。そしてそのあとに幸運の鍵があったことを示唆することで、ヒロインの死をさらに悲惨なものにしている。この物語でもエールマンは、不幸に徹頭徹尾立ち向かう必要があると読者たちに訴えているのである。

4）ウルフェルト伯爵夫人物語　宮廷生活からの描写

Geschichte der Gräfinn von Uhlfeld. Ein Gemälde aus dem Hofleben.

実在の人物レオノーラ・クリスティーナ・ウルフェルトについての物語である。彼女は1621年にデンマーク王クリスティアン4世の私生児として生まれ1698年に没した人物で、語学や文学の才能に恵まれ、彼女が残した自伝は17世紀デンマーク文学の傑作とされている。[ix] 宮廷での権力闘争と投獄、逃亡の繰り返しの人生を送り、波乱万丈ながらまさに「真実の物語」である。エールマンはこの歴史読み物を読者の教育のため供したのだという。（1790, H. 11, S. 97）「不幸において死をさげすむことは容易だが、もっと強いのは惨めさに耐えることのできる人だ」（1790, H. 11, S. 111）という伯爵夫人が獄中で残したとされる言葉を紹介している。いかなる不幸にあっても耐え抜いた女性という点で、彼女は確かにエールマンにとって読者の教育のための格好の素材と思えたはずである。しかしそんなウルフェルト伯爵夫人の人生を語ったのちに「ただ彼女は、もっと穏やかな方向に、名誉欲をそんなむき出しにしなければよかったでしょうに。この才能にあふれ精神豊かな女性が宮廷に隠されていなかったとしたら、彼女は自分の高貴な出自のことは知らずに、彼女を自分の人生に巻き込んでしまった強情な反逆者の妻になることもなく、そうしたら私たちも、彼女をもっとも完璧な女性のうちの1人であると感嘆したでしょう。精神豊かな

人間たちは、たいていその偉大な性格によって同じように大きな間違いを犯すのです」(1790, H. 11, S. 119) と、身分が高いことなど、傍からみると幸せの要因であるようなことも不幸の原因になることがあるとたしなめている。

エールマンはウルフェルト伯爵については最後で「強情な反逆者」と呼んでいるが、物語の経過においては、彼も彼の権勢を妬む政敵たちの悪意に出会い、不幸に巻き込まれたように描写し、本人の人格描写では賛辞しか書いていない。エールマンが人格描写をするときには揺れがあるように思われる。彼女はやはり不幸は本人の責任であるととらえているようである。

４つの物語に共通するのは、すべて不幸におわるということである。エールマンの作品はどれも幸福に終わることがない。「性格描写」Karakterschilderungenと題された8回の連載論文においても、まじめな人間も、男に媚びを売る女も、みなそれぞれの性格ゆえに不幸になるように描かれている。だからこそ普段から自分の人生に気を配らなくてはならないというのがエールマンの主張の趣旨であると理解できる。それはこの雑誌自体が掲げた読者の教育という趣旨とも合致している。しかしこの目的のために作品の質が確保されないのは残念に思われる。作者エールマンは読者に人生の諸問題を自分で考えるための課題にしたいという意図があるが、読者の側はこの物語をまず楽しみのために受容するはずである。そして雑誌の同時代性が失われた後にも、テクストの質は残るからである。読者が第一に判断するのは作品の質で、まじめなはずの話が誇張によって滑稽になってしまったならば、読者は作品にこめられた教訓を無視して笑い飛ばすことになり、それがまた18世紀小説の抱えた問題でもあった。

さらにこれら4つに共通するのは、タイトルにGeschichteの語が含まれていることである。これは「歴史」と「物語」の両方の意味がある。18世紀末まで両者は混同されていたが、エールマンのこれらの用例がまさにその混同を表していると思われる。そのころまで歴史は読者の教育のための素材であり、知っておくべき知識・教養とみなされていた。そのために、事実と大きく異ならない程度に想像力に基づいて記述することが許容されていたのだった。しかしランケらが科学的実証的な学問としての歴史学を目指し、19世紀初頭にはそれまでの教養とは一線を画した学問としての道を歩み始めた。ウルフェルト伯爵夫人の物語のように現実の歴史であることがはっきりしているケースがあるが、そのほかは「本当の」wahrという形容詞も添えられているが、これに対応する人物や事件が現実にあったわけではない。読者に人生の問題を見通しよく提示したいと考えていたエールマンにとっては、これらの出来事も本当にありそうなこととして伝えようとしたはずである。これらの小説には、事件の報告としてのジャーナリズム的な側面があったはずである。雑誌というメディアから考えても、事件の報告という時事的な性格が備わっていたといえる。18世紀末に教育と娯楽、それに加えてジャーナリズムが緩やかに混合した状態で、エールマンの雑誌掲載作品は成立したのである。

４．まとめ　ジャーナリズムと創作の間

エールマンの雑誌掲載作品には、現実に起こったことのみならず想像して書き加えた部分が認められた。それは作品の教育的効果を意図していたことも、書き加えられた部分の分析から読み取ることができた。しかしこれらの本来の目的のための箇所が、作品の自然な筋の展開を阻害し、

いたずらに不幸な結末を反復することにつながっている。悪いことをすると悪いことがあるという懲罰感情は、読者への教育効果を高めることを期待して加えられたはずであるが、しかし小説として作品をとらえた場合に、エピソード相互の関連が欠けていて残念ながら駄作に終わってしまっている。月刊誌には新しい出来事を伝える時事問題の報道・解説・批評を行うジャーナリズムの役割があったが、一方で創作された作品には、 普遍的な出来事を描き出す芸術としての目的もあった。18世紀末の小説の発展において、「楽しませつつ教える」という目標は重要な意味をもっていたものであり、エールマンの作品は思想史の流れの一段階に位置づけられるのである。

本研究は、以下の科研費の支援を受けた研究プロジェクトの一環である。
［課題番号］26770115／［研究種目］平成26年度　若手研究（B）／［研究代表者］北原寛子
［研究課題］18世紀から現在にいたるBildungsroman概念の展開に関する文献学的研究
JSPS KAKENHI Grant Number 26770115

---

i Vgl. Friedrich von Blanckenburg: Versuch über den Roman. Faksimileausgabe der Originalausgabe von 1774. Mit einem Nachwort von Eberhard Lämmert. Stuttgart 1965.

ii ヴェーツェルの作品については以下の拙論で扱い、小説の発展への貢献を分析している。Vgl. 拙論「「市民的叙事詩」としての小説　―近代小説理論の展開から読むJ. K. ヴェーツェル『ヘルマンとウルリーケ』」、『ドイツ文学論攷』（阪神ドイツ文学会）第56号（2015）所収、5－27頁。

iii Vgl. Peter Nusser: Trivialliteratur. Stuitgart 1991.

iv エールマンの伝記については、次の研究を参照にした。Vgl. Edith Krull: Das Wirken der Frau im frühen deutschen Zeitschriftwesen. Berlin 1939. Britt-Angela Kirstein: Marianne Ehrmann. Publizistin und Herausgeberin im ausgehenden 18. Jahrhundert. Wiesbaden 1997.

v 引用に用いた版は次のとおりである。
Amaliens Erholungsstunden 1790-1792. Teutschlands Töchtern geweiht von Marianne Ehrmann. 12 Bände, Stuttgart, (ab 1791) Tübingen. Hstorische Quellen zur Frauenbewegung und Geschlechterproblematik Nr. 42. 24 Mikrofiches. Erlangen 1999.
引用に際しては、マル括弧に発行年、号、ページを併記する。

vi 雑誌の発行部数については以下の研究を参照にした。Vgl. Bernd Fischer: Marianne Ehrmanns Amaliens Erholungsstunden“ und die J. G. Cottaische Buchhandlung. In: Marianne Ehrmann, geb. Brentano: Amaliens Erholungsstunden. Nachdruck einer Monatschrift. Originalausgabe Stuttgart 1790. 1. Bändchen mit einer Einführung herausgegeben von Siegrid Düll unter Mitwirkung von Berhard Fischer und Josef Walling Sankt Augustin 1998, S. 31*-69‘.

vii Marianne Ehrmann: Amaliens Erholungsstunden, Teutschlands Töchtern geweiht. Eine Monatschrift von Marianne Ehrmann, Verfasserinn der Geschichte Amaliens. [Unterz.]: Die Verfasserin. In: Journal des Luxus und der Mode. Jahrgang 4(1789) November. Interigentblatt, S. CLXI-CLXV, S.CLXII. Auf HP: http://zs.thulb.uni-jena.//jportal_jparticle_00085989

viii Ebd,. S. CLXIII.

ix Theophil Friedrich Ehrmann: Denkmal der Freundschaft und Liebe der verewigten Frau Marianne Ehrmann errichtet, und allen ihren Gönnerinnen, Freundinnen, Leserinnen geweiht. Leipzig 1796, S. 158f.

x Vgl. Gotthard Heidegger: Mythoscopia Romanthica oder Discours von den so benanten Romans. Faksimileausgabe nach dem Originaldruck von 1698. Hrsg. von Walter Ernst Schäfer. Bad Homburg v. d. H., Berlin u. Zürich 1969, S. 131f.

xi Vgl. レオノーラ・クリスティーナ・ウルフェルト著　『嘆きの回想』　山野邊五十鈴訳注　大学書林　1994年。